

3. 家族の受けた被害

《家族の受けた被害》という質問項目にかんして、「調査票」の回答選択肢として、「自宅が消毒されたか」という設問では、「1. [病気のことが] まわりに知られて消毒された」「2. まわりに知られても消毒されなかった」「3. まわりに知られずにすんだ」「7. わからない」「8. 自宅はなかった [=非該当]」「9. 無回答」というものを用意した。さらに、「学校に通っているきょうだいや子どもが差別を受けなかったかどうか」「近隣関係で孤立しなかったかどうか」「家族や親族で離婚された人がいなかったかどうか」「家族や親族の結婚話が破談にならなかったかどうか」といった設問でも、同様のパターンで回答選択肢を用意した。

しかしながら、入所者のみなさんの聞き取りでの語りに耳を傾けるかぎり、《家族の受けた被害》の割合を数値で把握するのは、きわめて難しいことがわかる。たとえば、ある入所者（男性、1941年栗生楽泉園入所）は、「自宅が消毒されることはなかったか？」という質問につきのように答えているが、ある意味で、きわめてもっともな回答だと言えよう。

うちは、近所からね、いちおう尊敬されてるうちだったから、そういう [=家が消毒されるような] めに遭わなかったんだろうと [思うけど]、俺、そこにいなかったから、わかんないよ。

また、ある入所者（男性、1952年長島愛生園入所）は、家族の受けた被害について、つぎのように語った。家族の受けた被害の実態の解明は、入所者と家族とのコミュニケーションがどのようになされているかに依存していることを、よく窺わせる語りである。

[家が消毒されたかどうか家族から] 聞いたことないなあ。したかもしれんし、しんかかもしれんし。[私の収容で、ほかのきょうだいが嫌な思いをしたかどうか]、わからない。わたし、ここへ入ってから、きょうだいは一度もここへ訪ねてきたことがないんだね。ここで長男が亡くなったとき、はじめて次男が葬式に来てくれた。あと、わたしのすぐ上 [の兄] と姉さんとおるんじゃけど、もう、ほとんど連絡ない。ハハハ。ここへ一度も来たことない。

わたしが [ここに] 入ってすぐに、きょうだいは、田舎から、外へ働きに出ていっとなるね。次男は家を取るから、家におるけど。三男と長女は、すぐ外へ働きに出てね。だから、そういうのあったんかどうかは、話さないからわからないけど。差別とかそういう話、おふくろさんから聞いたのは、わたしが入ったあとすぐに、親戚づきあいが疎遠になったということだけは聞いた。だいたい、こういうあれは身内から起こるんだよね、差別いうのはね。

《家族の受けた被害》は、基本的に、本人自身の体験ではないこと、本人がその場に居合わせたわけではないことならについての設問である。しかるに、入所者の多くは、ハンセン病療養所に収容後、外の社会の家族とのつながりが切断された者が多い。あるいは、家族とのあいだに面会や手紙のやりとりなどのつながりが継続していた場合でも、外の社

会で家族が受けた被害について、家族の者たちが、収容された本人に心配をかけてはいけなと考えて、被害実態についてこと細かに話していないことも多いのである。したがって、かくかくしかじかの家族の被害は「なかった」という回答は、厳密に言えば、「家族から被害があったとは聞いていない。実際のところは、わからない」ということを意味しよう。事実として確かであろうと言えるのは、家族から、かくかくしかじかの被害を受けたと「聞いている被害」について、「被害があった」と回答している場合だけである。——「被害実態」についての統計的集計結果を読まれるときには、以上の点を注意してほしい。つまり、統計的数値には表れない《家族の受けた被害》が、どれだけ潜在しているか予測もつかない、ということである。

以下では、《家族の受けた被害》について、入所者の方々が聞き取り場面で語ってくださった語りの一端を示していきたい。

ある入所者（男性、1939年多磨全生園入所）は、彼の母親が強制収容されたときの「消毒」で住まいの引っ越しをよぎなくされた事情をつぎのように述べている。

〔母が収容されたのは〕わたしが生まれてすぐです。だから、1932年。いわゆる産後の肥立ちが悪いというようなあれがありますが、わたしを産んだあと、体調を崩して、病院へ行って診察を受けたところ、ハンセン病だという診断が出て。その前の年に、「癩予防法」の旧法が出たばかりですから、無癩県運動やなんかが始まった段階ですから、もう、たちまち強制収容されてしまったらしいですよ。で、家の内外を真っ白に消毒されたために、北区に住んでいられなくて、父が、急遽、足立区に家を借りて、そこへ転居したんです。

さらに、母の病気を理由に、長兄の「行方不明」、姉の「離縁」が生じている。

わたしと18歳ぐらい違う、一番上の兄が、もうそのとき失踪してしまっていた。なぜ失踪したかという、母の発病によって、なんか、姉の話だと、恋愛中の女の人が出て、その女性と結婚できない、と。母が発病して、女性の親から、なんか言われたんじゃないか。それで、家を飛び出しちゃった。駆け落ちじゃない。独りで〔失踪〕。それで、その後、行方不明で、全然、いまだにわかんないんですよ。

それから、いちばん上の姉も、わたしが5歳のときに、言うなら、望まれて望まれて結婚したのに、母がハンセン病だってことを全然知らないで結婚した相手は、母が病気だってわかったら、ただちに〔姉を〕離婚した。

ある入所者（男性、1944年栗生楽泉園入所）は、自分が療養所に入所したことで父親が会社役員を辞職した経緯について、つぎのように語った。

父は、会社の常務取締役をやったんです。で、息子が病気になって、療養所に入って、大きな顔で会社には勤められないと思ったんでしょうか、会社を辞めた、いまは浪人してる、という手紙があとから来ました。

ある入所者（男性、1944年多磨全生園入所）は、寺の過去帳に「レプラ」と書かれていたという事実について、つぎのように語った。なお、これは、本人の発病・入所に際してのものではなくて、ハンセン病を患い自宅療養のまま亡くなった叔父がいたことをめぐってのものであると考えられる。

〔昭和39年に〕親父が亡くなって、そのあと、わたしはお墓を見に行っていたことがあるんですよ。で、しょうのない状態だからね、お墓を直すんだったらば、おれにも分担させろって、そういうことを総領〔＝長兄〕に話したことがある。そしたら、「誰がおまえの金なんか」って、わたしのお金がさも汚いものであるかみたいだね、そういう言い方したけれども。お寺が墓地の区画整理をする計画があるから、それまでじりじりしながら待ってるんだってという話だったんですよ。それから、いよいよそういう区画整理がすんで、うちのお墓も新しい墓石をつくって、古い墓石は後ろのほうへまとめてしまうみたいだね、そういうことをしたんですよ。で、するについて、わたしのうち、〔空襲で〕火事で焼けてるでしょ。過去帳がうちにはないから、お寺のやつ見せてくれて、お寺の過去帳、わが家の先祖のあれを借りて見たっていうんですよ。そしたら、うちの家系のところにね、「レプラ」って書いてあったっていうんです。あの総領は、それをそのまま文句も言わないで返したかなあと思うんだけどね。わたしだったら、お寺に怒鳴りこむぞって言うんだけど、いやいやそんな、事を荒立てるってことが、もうほんとに怖いみたいだね、総領は。だけど、「それは腰が抜けるほどショックだった」ということは言ってましたね。お寺の過去帳にね、そんなことを書いていいはずはないし。

お寺の坊さんっていうのがね、貧乏寺だから、市役所へ勤めていて、市役所で兵事課をやってたっていうのよね。兵事課なもんでね、早くに情報がわかるんでね。総領が兵隊に行くときに、うちへ、真っ先に知らせに来て。お盆の棚経（たなぎょう）をあげに来たときに言ったのかな。「おたくの〇〇さん〔＝総領〕は、近衛連隊に入るみたいだなあ」って。それで、いちおう、〔総領は〕「近衛なんか戦争に行かないから、あんなところはつまんない」って言ってたんですけれども。それで、もう少ししたらね、「静岡の三十四連隊だ」って言ってきましたね。だから、親父が、「あ、やっばりなあ」って、こう言ったんですよ。「やっばり」っていうのが、お寺のあれ〔＝過去帳〕にまで書いてあるほどのものだから、やっばり、いちゃもんがついたっていうことだろうと思うんですよ。

おなじ入所者が、自分の発病・収容がきっかけで、父親が「部農会長」という役職を辞めさせられたことについて、つぎのように語った。

部農会長っていうのがあったのね。字（あざ）のなかに、町会長と部農会長があって、これは、字の顔役たちが寄り合いをやって、話し合いで決めちゃうんですよ。選挙なんかやるようなそういうふうなあれはなし。旦那衆が自分たちで決めて。それぞれみんな格があるから、家にね。で、そうじゃないほうの、下っ端のは、うちの小作人であったりだとかっていうようなことでもって、もう有無を言わせないのね。それで、

この部農会長っていうのは、当時はね、肥料の割り当てだとか米の供出の量だとか、そういうものを決める役目なんですよね。だから、町会長よりも当時としては権限が大きいんですよね。うちの親父がこれを即座にやめさせられた。背戸（せど）の人がうちの親父の後釜になったんですけれどもね。運営に私心（ししん）があったって、村じゅうの噂になってね、奥さんが首吊って死んだんですよね。後釜になった背戸のうちの人が、肥料の配給の割り当てだとか、米の供出の負担だとか、そういうものを決める段階でね、手前勝手があったっていうか、私心が作用したっていうことを噂されて、それで「奥さんが」首吊って死んだっていうことを言ってましたけれどもね。あの、うちの親父は、やかましい人だった。そういうことがうるさい人だった。

ある入所者（男性、1947年邑久光明園入所）は、自分が療養所に収容されたあとの「家族の受けた被害」について、「自宅が消毒されたましたか？」という質問に、「なんかされたとかいうて聞いたよ。ぼくが来てから」と答えたあと、慎重に言葉を選びながら、つぎのように語った。

県庁とか警察が入り出すっていうことがね、そもそもおかしいからね。そらもう、みな、なんかあったっていうことは勘づいとるからね。で、「あの人は、もう、治らん病気になった」とかね、そういうようなことを、まあ、なかなかね、きょうだいもぼくに面と向かって言えないんだかどうか知らんけどね、そういうようなこと言わんけどね、「ぼくが」こっちへ来てからね、だいぶん苦労したっていうようなことを、きょうだいも言うてました。そらそうや、ぼくだって自分で好きこのんでなった病気やないからね。自分が悪いっていうようなこと、まあ、そら、病気になったことが悪いんやろうやけどやね。だけど、まあ、むこうはそういうようななにて、だいぶん、ぼくのために苦労しとるっていうんかね。まあ、ここ何年かのうちに、そういうようなことをちょこちょこ口に出して言うわね。

一番下の子やなんか、「当時、学校に」通ってました。「その子が」じっさい「学校で」いじめられたかわからんけどやね、ぼくには、そういうことは聞いてないわ。ま、そら、いまでも言わんのかどうか知りませんけどね。

だけど、女のきょうだいは、そういう病気のきょうだいやからね、もらってもらえればどこへでも嫁に行くという、そういう覚悟でおってね。女のきょうだいは、ふつうは、長男の家ですか、舅とか姑がおるっていうようなところへは行かなんだと思うけどね、まあ、嫁にもらってもらえれば、どこへでもいくというようなかたちで結婚したっていうようなことを、いまでも言うてます、それは。女のきょうだいは。

ぼくは18で来とるわけやからね。下のほうの妹とかはみな、ぼくが「療養所に」来てから結婚したんやから。で、みな、長男の家へ嫁にいったっていうこと聞いて。なんか、イトコまでね、あそこのイトコがこうこうこういう病気やから、いうて、縁談を断られるってことがあるとかいうてね。うちのきょうだいもそういうふう言うてたからね。やっぱり、そら、この病気になってから、親きょうだいもさうとう苦労しとるといふことは、目に見えてわかるような気がしますけどね。「でも」なかなか面と向かってぼくには言えなんだ面もあるんじゃないかなと思うけどね。「近所との関係

で孤立したとか] そういうようなことはぼくは聞いてないですけどね。そら、あってもやね、本人に言わんからね。

ぼくがこういう病気になって、こっち来てからね、昭和の48、9年かなあと思うんやけどね、兄貴の子どもが、「こんなところにおったらいかん」とかいうようななにでやね、家を処分してしもうてね。もう、ぼくが生まれた家とか土地とかいうものはみな処分してね。で、ちょっと場所のええ所（どこ）へ[引っ越したと]。ま、そら、ぼくは行って見るわけやないからね。この目で確かめたわけじゃないし。ま、きょうだいかって、そのころになったら、みな嫁にいったりなんかしとるしね。ま、あとで聞いた話やからね。

やっぱり、肩身の狭い思いをしてたんじゃないかなという気はするよ、みなね。さっきから言うようにね、ぼくには面と向かって言わんけどね、最近たまに、この話のなにのときにね、だいぶん、むかし苦労したっていうようなことを言うてますからね。どこをどうしてどういうふうになって苦労したっていうことは言わんけどね。

ある入所者（男性、1947年邑久光明園入所）は、家族の受けた被害について、つぎのように語った。直接自分が体験していることではないので、表現は控え目であるが、だからこそかえって、被害があったにちがいないことを窺わせる。

[きょうだいで療養所に収容されたことで、家族に]影響はあったやろうと思う。[近所には]知られてたな。[自宅の消毒も]たぶんされたんだと思う。

[うちは]百姓やとった。せやから、仕事を失うことはなかったと思う。そやけど、やっぱり、[きょうだいで]こっち[=邑久光明園]来たもんやで、その百姓のほうも、だんだんだんだん手放していったんちゃうかなと思う。

やっぱり、結婚というそういうものにはかなり影響したと思う。兄貴は、結婚してから、こういう病気[の家族]が[いると]わかって、奥さんと別れた。そやから、兄貴はそういう面では苦労しとると思う。

姪がおったんやけど、姪もかなり苦労しとると思う。[姪の]親が[病気で収容されて]おらんようになったから。[姪は]かなり、いじめられたかもわからん、学校で。そういう話を聞いたことある。

ある入所者（男性、1951年栗生楽泉園入所）は、寄留先の親戚が「消毒」されて迷惑をかけることになったと、つぎのように語った。

役場の車で、ここまで連れてきて、ここへ入れちゃった。自分で自由に来たんじゃない。強制的じゃないか。……群馬大学[病院]であれ[=受診]して。それで、こっち行けばいいって、紹介状書いてくれたから。それで、役場から[車が来たからね]。群大から役場に連絡したんじゃないか、この病気だって。それで、車で来たの。

[そして、私が寄留していた親戚のうちを]消毒したよ。だから、困ったんですね。おれ、行ってから、消毒したんだ。役場から来て、ぜんぶ消毒して、すごい、あれやったらしいよ。

ある長期入所経験者（男性、1950年星塚敬愛園入所）は、小学生の娘が学校でいじめにあったことについて、つぎのように語った。

〔私の〕長女は、「男とケンカしてもね、わたしは負けない」というような性格を持っておりました。それが、小学校の2年生のときだったと思います。家内がここに来て私に話したことですが、「Mちゃんが泣いて帰ってきて、お母さん、なんとかしてくれと。どうにかしてくれんと私はもう学校へ行かんと行ってごねるから」って言うて連れて来たんですよ。「どうしたの？」って言ったら、Mはもう黙ってグスグス涙ばっかし流しながら、黙っとったけれども、男の連中が、うちのMに「らい病が、らい病が」と言うたって。「私はらい病じゃないよ」って。「おまえは親父がらい病じゃないか」。「らい病ムラ」とか「らい病院」とかなんとか言うたって、「そこへ行ってるじゃないか」って。「お父さん、病気で、そこに行ってるけれども、私は病気じゃない」。口は達者ですよ。それで、頭もいいんですよ。〔高校を出たあと〕東京の音大に行ったわけですから。Mは相撲も強いし、男を蹴ってなににするぐらいのあれをもっとったから、「なにを」と言うてね、「お父さんが病気だからといって、私は病気じゃないじゃないか」と言うてとっくみあいしてね、ノートで一生懸命叩きよったらしいわ。それで先生が来て、「2人とも職員室に来なさい」ということで職員室に連れて行って、「どうしてこうなったの？」つったから、「先生、私は病気じゃないのに、なにになに君が私もらい病よって言った。先生、私はらい病じゃないですもんね」つったら、黙って先生は聞いとったらしいけど、「◎◎さんよ、あんたはそう言うけれども、あんたもらい病だよ」っていうような意味のことを言うたと。で、Mはね、先生に、泣きながら、「そうじゃない、そうじゃない」って言うてね、なに〔＝抗議〕したと。それで、校長が来て、「もうとにかく、そういうことでなにしなさんな」と。「先生、あんたも間違ってるよ。病気じゃないじゃない。健康児じゃないか」って。校長がそう言うてなだめてもね、先生は「らい病はらい病ですよ」って言うたと。取り消さんかったと。それで帰ってね、それを母ちゃんに言うて、飯も食わんで泣きながらなににするから、「明日、父ちゃんのところに行って、父ちゃんに話そうね」っていうことで、そのことで来たと言うんですよ。「どうしたらいいか？ Mが学校に行くようにしてくれんですか？」と。もうそれ聞いたらね、ほんとにもう私みたいな性格でしょ。「わかった。Mちゃん、心配せんでいい。そこの学校はね、行けんかったら、別の学校に転校するように私がなに〔＝段取り〕するから。その代わり、Mちゃん、私はその先生を許さんよ」つったの。「どういうこと？」って言うから、「いや、叩き殺しても許さんよ」って言うたらね、家内がね、「そんな変なこと言わんでもいいやろ、子どもに」って。「その先生にね、謝らしてくださいよ」って。「謝らしたら学校に行くか？ 謝らしたら、学校に行けばいいよね、Mちゃん」って。「だからもう、先生に謝らしてくれ」と言うからね、私はもう、承知せんということね、「刀がまだあるけ？」うちにあった短刀を持ってね、出ようと思ったんですよ。私は、もう、人生、これでいい、と思った。子どもまでね、らいでもないのに〔差別するなんて〕。

ここにはね、未感染児童の保育所があつてね、「未感染児童」ということで、また私

は延々とケンカしたから。「なんでこんな言葉を使うか」と。〔いずれ感染するはずだみたいな表現は〕おかしいじゃないか。しかし、そういうふうには法律に載ってるんですよ。だから、これはどうにもならなくて、園長が言いよったことがありますけどね。そういうことがあったところにですね、そういうこと〔＝娘のMが差別された話〕を聞くでしょ。だからもう、私の命を代えてもいいと思ったんですわ。それで、それ〔＝短刀〕を持って行ってね。それこそいまではもう錆がついて使えそうなあれ〔＝刀〕でもないけれども、〔当時は〕ピカピカに研いであつたからね。

そういうことがありました。教員というもの、医者と看護婦と知識人、こういう方々がね、いちばんこの問題を認識してくれにやいかんの、いちばんなに〔＝理解〕してくれない。

〔娘の差別の件は〕学校にね、手紙を書いて、嫁に持たして、Mを連れて学校に行って、校長に会って、その先生に謝らせろと。その先生を呼んで、Mの前で、「Mさん、私はそれ間違っておった。お父さんはそうかもしれんけど、あんたはそうではないんだ」ということを言ってくれ、と。先生がね、頭を下げたか下げんかったかはね、〔確認していません。〕もうほんとに、その先生はあんまり芳しくない先生でした。それからもう、〔子どもたちは、家内の〕妹のところに行って、学校を転校させました。

ある入所者（男性、1951年大島青松園入所）は、この聞き取りの時点からみて「去年の暮れ」、つまり2002年に、姪御さんが、ハンセン病の伯父がいることを理由に「破談」になったということを証言された。

〔私の弟には〕子ども2人いるんだけれども、まだ結婚してない。長女に結婚話が出て、ほぼかたまりかけたときに、私のことがわかって、去年の暮れだったかな、破談になった。そんな例は、いっぱい、いまでもある。

ハンセン病患者の「強制隔離政策」がもたらした《家族・親族の被害》は、過去の話ではなくて、いまなお現在進行形の被害なのだ。